

ようこそ ルーテル学院大学・日本ルーテル神学校 へ

日本ルーテル神学校 校長 石居 基夫



東門を入ると、整備された芝生が広がる。その向こうには、十字架のついたチャペルの姿が凛々しくある。大きな板と曲面を組み合わせた要塞のような外観のチャペルは、建築家村野東吾によって学校敷地の中央あたりにデザインされ、取り巻くように研究室と教室、そしてグラウンドが配置されていた。

今年創立110周年、三鷹移転50年目を数える。この50年のうちに、増築なども進んで、学校全体のデザインは変わってきた。それでも、やはりこのチャペルは名実ともに本学の中心。

チャペル内部の正面には、新しく2本の大きなステンドグラスがはめられた。向かつて左は旧約聖書から創造の水、右手は主イエスの命の水が表現されている。数年前に、教会の皆さまからの大きなお支えによって与えられたパイプオルガンは、礼拝堂全体を一つの楽器とするように、素晴らしい音色を響かせる。授業のある日は毎日ここで、お昼に礼拝が行われ、学生も教職員も神の恵みを分かち合う。

1969年の三鷹移転は、神学校が大学としての認可を受け、それに伴い施設拡充が必要になったためだが、大学・神学校そのものが大きな使命を確認する機会となった。76年にキリスト教社会福祉コースを設置し、のちに社会福祉学科と改組、大学院まで設置する。また、2005年には臨床心理学科を立ち上げる。ルーテル学院大学・神学校が、単に教会

で働く牧師を育てるばかりでなく、地域社会の中で、様々な困難を抱えて生きる人たちのために働く人材を養成するという使命を確かめて、新しい形の中に実現してきたのだ。



が多く巣立っていつてきていることが嬉しい。卒業生は、日本各地の地域社会、施設、病院、学校などで働き、本当に良い働きをしてきている。

学校を後にしようと、緑の芝生に覆われた校庭の一本の道を行くと、チャペルを振り返るようにして小さな記念碑を見ることが出来る。「自分のためだけでなく、隣人のために生きて仕える生に神の祝福があるように」と刻まれたルターの言葉は、学校が卒業生たちの背中に送る、祝福の言葉だ。

ている。社会の大きな変化の中で、教会での女性の活動も変わってくるだろう。新しい世界を作り出していく女性への期待は大きい。神学校では、神学一般コースを今年度から設置した。現役社会人としてすでに働きに一区切りした方々3名が学んでいる。聖書や信仰の教え、歴史を学べるばかりでなく、神とは、宗教とは、人生とは何かと、改めて問うていくような学びができる。信徒教育の一つの機会と考えてもらえるといい。女性会の皆さんにも是非に、と願う。

本館一階の廊下の壁にかけられた一枚の油絵は、キリスト教社会福祉コースの頃の卒業生、藤崎るつ記さんを記念したもの。卒業後、彼女はアジアの貧しい人々のため働こうと、フィリピンに渡りさらに学びを続けていた。その最中、溺れかけた二人のフィリピン人友人を助けるために自らは命を失った。彼女の志とその生涯を覚え、一粒の麦が地に落ちて、豊かな実りとなるように描かれた鮮やかな黄金色の色彩は、本学で学ぶ者の志を問い続けている。



神学校は現在4名が在籍。そのうち日本福音ルーテル教会の神学生は3名で、いずれも女性。日本福音ルーテル教会の現役女性教職は現在9名を数えるのだが、世界的にも女性教師はどんどん増え

2014年度に大学は、キリスト教的人間理解を基礎とした「心と魂と福祉の高度な専門家」を養成することを目指して人間福祉心理学科の1学科5コース制に改組した。1学年の定員が100名ほどの小さな大学だが、一人ひとりの命と尊厳を守り、共に生きる社会を実現するような人材

